

第 59 回 日本生殖医学会学術講演会・総会が 2014 年 12 月 4 日（木）及び 5 日（金）に東京で開催され、院長及び培養士 2 名が参加しました。

今回は、培養士 2 名が学術発表を行ないました。

テーマ

- ・『Multinucleated Blastomeres 胚でも、胚盤胞移植ではより高い妊娠率が得られる』
- ・『良好胚盤胞移植における経腹超音波ガイド下と、経膈超音波ガイド下での比較検討』

『Multinucleated Blastomeres 胚でも、胚盤胞移植ではより高い妊娠率が得られる』

一つの割球に二つ以上の核膜が観察される現象を多核（Multinucleated Blastomeres）と呼びます。詳しい原因は不明ですが、胚盤胞発育率及び妊娠率が低く、流産率が高いとの報告があり、当院でも胚移植の対象から除外してきました。しかし、患者さまの治療年齢が上がるとともに採卵数は減少してきており、多核胚が移植の対象となるケースが増加しています。

そこで、当院にて多核胚を移植した症例について検討した結果、胚盤胞移植では分割胚移植より妊娠率が高い傾向にあり、妊娠症例では非妊娠症例より良好胚盤胞率が高い傾向にありました。また、出生児に異常や奇形は認められませんでした。すなわち、多核胚でも胚盤胞移植ではセレクションが行なわれ、分割胚移植よりも高い妊娠率が得られ、さらに、良好胚盤胞まで培養すれば、より高い妊娠率が得られる可能性があると考えました。よって、多核胚移植も治療方針の一つとなり得ることが示唆されました。

『良好胚盤胞移植における経腹超音波ガイド下と、経膈超音波ガイド下での比較検討』

前回の日本生殖医学会で、現在当院で施行している経膈超音波ガイド下での胚移植法（新法）が、従来法よりも患者様の負担が少ないこと、移植時間の短縮や、より明瞭な断層像を得られることにより、妊娠率、着床率ともに高い傾向にあることを発表しました。

今回は、前回の検討に引き続き、良好胚盤胞移植において、胚移植法の違いが臨床成績にどのように影響を及ぼすのか、後方視的に比較検討しました。結果、平均年齢及び妊娠率、着床率において、有意差は認められませんでした。今回得た結果から、患者負担の軽減、手技が容易、超音波画像が鮮明に見えるために、患者様の満足度が高く、至適位置への胚移植が可能であるなどメリットの多い新法を、当院では今後も継続していきます。

2 日間に亘る学術講演には、多種多様なテーマの発表がされました。

新しく得られた様々な知識を、当院が理念とする、患者様一人一人に合わせたテーラーメイドの治療に役立てていきたいと思いました。